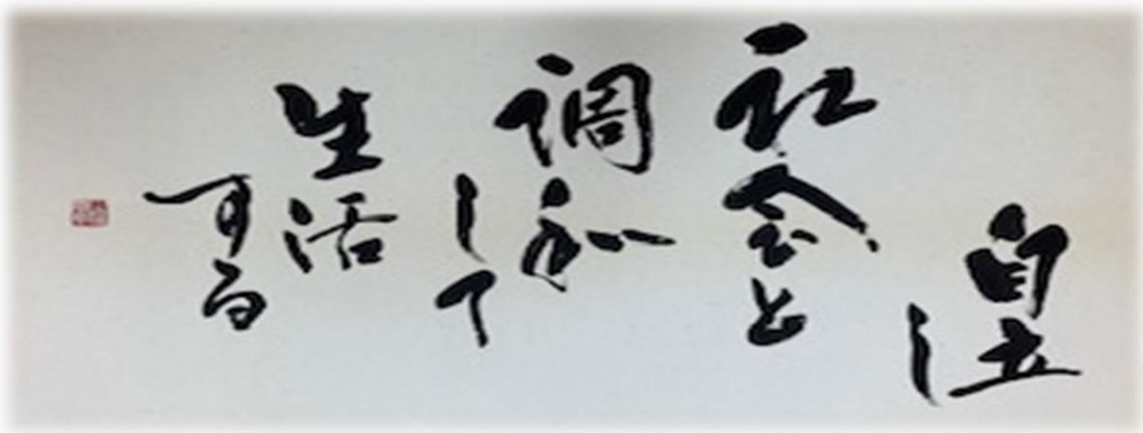


喜多原だより

NO. 71

平成31年4月



自立し、社会と調和して生活する

喜多原学園 園長 田中 浩之

昨年の喜多原だよりで、学園の理念の紹介をさせていただきました。一年が経ち、折に触れ、いろいろな場所での理念について話してきましたので、大分、周知されるようになってきたように思えます。

世の中には、理念がある会社と明確な理念がない会社があります。現在だけを見ると、どちらの会社でも成功している場合もあります。しかし、長い目で見てみると、理念がしっかりとした会社とそうでない会社では差が出てきます。しっかりと哲学や思想がある会社が、残っていくものです。

会社だけではなく、人が営む組織はすべて、理念（基本となる考え方）がなければ、いつでも崩れ去る不安定なものだと言われています。

平成二十四年から社会的養護関係施設において第三者評価が義務付けられています。この第三者評価の評価基準項目で最初に出てくる項目が「施設の理念」です。

理念は、組織の目的や存在意義、使命（ミッション）を明確にしたものです。また、理念は組織の根幹となるものなので、そう簡単に変えるものではないのですが、時代のニーズに合わせて

て、変わるものでもあると言われていきます。

そういったことから、私が二年前に喜多原学園に赴任した際に、まず気になったことが喜多原学園の理念でした。学園には、「明るい子 強い子 考える子 働く子」という園訓がありましたが、更に明確に支援の目的や拠り所となる、強い求心力のある新しい理念が必要だと思ったのです。

国立武蔵野学院の院章は、「蓬生麻中不扶自直」という荀子の言葉を意匠したものです。この漢文の意味は、「曲がりくねる性質を持つ蓬も真直ぐに育つ性質の麻の畑に植えると、自然と自ずから真直ぐに育つ」すなわち「子どもの成長は環境が大切である」という環境療法的な考え方です。私が養成所生活をしていた頃の武蔵野学院には、この考え方が色濃く職員の教育観に感じられたものでした。これは、公に掲げている理念ではないのですが、武蔵野学院の理念の一つであることは間違いないのです。

また、現在の全国児童自立支援施設協議会のホームページの中で児童自立支援施設全体の理念として、「ともに生き、ともに育ち合うこと」を掲げています。この言葉の由来は、戦後四半世紀以上、武蔵野学院長を務めてい

た青木延春先生が、精神科医カナーの考え方から影響を受け、広めた「WIT日の精神」という言葉が元になっています。

理念は、その組織や会社、施設の誰かが創り出す場合もありますが、理念の由来となる言葉があり、掲げられる場合も多いわけです。

喜多原学園の理念は、私の提案をあり方検討会で協議してもらい、策定した経緯がありますが、この理念についても何もない所から創り出したものではありません。

国立きぬ川学院の初代院長の石原登先生は、情性の育成を看護活動の根幹としていました。いわゆる「情性教育」と呼ばれるのですが、これがきぬ川学院の本来の理念です。

情性とは、簡単に言えば、「社会と調和して生活する力」です。石原先生は、東京大学哲学科で教育学を学んでいたためか、看護院（児童自立支援施設）における支援を「教育」と位置付け、「治療」や「矯正」「訓練」という視点は否定していました。また、時代的なものもありますが、「福祉」という立場でもなかったように思えます。

私は、きぬ川学院での生活が長かったこともあるのですが、きぬ川学院に

勤め始めた当時、石原先生の考え方を徹底して教授してくれる先生がいて、この情性という考え方が身に染みついていくのです。したがって、「情性教育」は私の中では、思考のバックボーンとなっていたのですが、それを更に明確に普遍的に説明するにはどうすればよいかということをもいつも考えていました。

さて、赴任先の喜多原学園には、武蔵野学院付属養成所の後輩である堀江健太郎専門員がいました。彼と話しをする中でアドラー心理学の話題となり、アドラーが述べていることが、「情性教育」と非常に近い考え方であることに気づきました。アドラーは、出来事を目的論として解釈していきますが、石原先生も同じような解釈の仕方をしています。

アドラーは、人生の目標を「自立すること」と「社会と調和して暮らせること」とし、家庭や学校における教育の目標でもあるとしています。石原先生は、教育の目標として、「情性」だけではなく、「知力」と「行動力」の二つの力も重視しています。この二つの力が「自立すること」に対応し、「情性」が「社会と調和して暮らせること」に対応しているように私には考えられたのです。

その後、アドラーに関する著作物に触れ、アドラー心理学会の家庭教育プログラム等を学んでみて、喜多原学園の新たな理念を「子どもが自立し、社会と調和して生活することを支援する」とすることにしました。

さて、アドラーの言葉である「暮らせること」を学園の理念の中では、「生活すること」と、敢えて変えています。

これは、留岡幸助らに影響を及ぼしたスイスの教育家ペスタロッチの「生活が陶冶する」という言葉を大切にしたかったからです。児童福祉法の中でも「生活」指導という言葉が使われています。

表紙に使用している理念の写真は、昨年末に元米子児童相談所長の山澤重美先生に書いて貰い、額装して会議室の正面に掲げています。

施設の理念は、職員だけが知っておくだけでなく、支援されている子どもたちや保護者の方々も知っているべきだと私は考えます。

「子どもが自立し、社会と調和して生活することを支援する」は、職員向けの理念、学園のミッションです。「自立し、社会と調和して生活する」は、子ども向けの理念、学園生活の目的です。会議室に掲げている書は、後者となっています。会議室の正面に掲げら

れた理念を職員も子どもたちも折に触れて、目にするようになります。入所式や退所式の時には保護者も、目にするようになります。子どもも職員も同じ目的を持ち、一緒に過ごしていくことで、学園生活は更に充実していきます。そうなると、子どもたちはもっと幸せに近づいて行くのだと思います。

最後に、「自立し、社会と調和して生活する」ことは、学園のミッションや子どもにとつての生活の目的だけではなく、私たち職員一人ひとりの人生にとつても、目的となっているのです。皆が同じ目的を志向していることは、まさに「ともに生き、ともに育ち合うこと」ということなのではないでしょうか。



スポーツ活動

中国地区野球大会

〓野球部監督 青島茂雄〓

今年度は五年に一度の開催県として平成三十年七月一二日から七月一四日の間、伯耆町総合グラウンドにおいて第六三回中国少年野球大会を開催県として迎えました。大会直前の七月に入りようやく入所児童が九名となり、久々の正式参加で臨むことができました。開会式では当園野球部主将

(中三男子児童)が、彼らしい言葉で選手宣誓をし、立派にやり遂げてくれました。試合結果は、四戦全敗(岡山成徳学校、山口育成学校、島根わかたけ学園、広島学園と対戦)でしたが、子どもたちは、最後まで諦めず、声を張り上げ一つのアウトをとることに必死にプレーしました。特に、島根県わかたけ学園さんとは、大会までお互いに県をまたいで何度も練習試合を重ね、わかたけ学園野球部の挨拶、礼儀、試合中の振る舞いなど毎年素晴らしい、今年も、子どもたち、職員とも多くを学ばせていただきました。大会本番では力の差は歴然でしたが、最後まで全力、本気で一切手を抜くことなく戦ってくださったわかたけ学園

野球部に感謝をするとともに、来年度も引き続き、施設間交流を深めさせていただきたいです。最後になりましたが、今回の野球大会の開催に伴い米子市野球連盟、伯耆町、県内児童相談所のみなさま、その他、多数の方々にご協力をいただけたことに心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。平成三十一年度は、島根県(出雲ドーム)開催となります。引き続き、喜多原学園の子どもたちの応援をよろしくお願いします。

〓男子児童作文〓

野球練習を始めたのは、四月ごろです。野球の練習をしてきた期間は、三か月間でした。

野球練習を始めるときは、野球のルールを知らない人ばかりでした。みんな素人でした。上手くなるために練習試合を何回も行い、練習試合だけでなく、海や山でトレーニングもしてきました。トレーニングはとてもきつかったです。

本番では、野球のできる人数がそろい、正式参加で大会に出場することができました。大会の試合では、二十点差で負けた試合もあつたりしました。とても悔しかったです。自分は、野球練習を始めた時、野球をあんまりやっ

たことがなく、ルールを覚えたりするのが大変でした。そして、副キャプテンだったので、声とか出てない時もあったけど、一生懸命野球練習に取り組みました。野球大会は、完敗だったけど、最後までみんなで声を出してやりきることができました。負けて、泣いていた人もいて、悔しかったのは自分だけでなく全員だったと思いました。自分は、最後までみんなとグラウンドに立って、一生懸命プレーし、野球大会を無事に終えることが出来て本当に良かったです。

野球大会で学んだことは、何事も最後まであきらめないことです。あきらめたらそこで終わりなので、野球大会以外でも何事もあきらめないことを忘れずに頑張っていきたいです。



中国女子児童バレーボール大会

〓女子バレー部監督 加川 綾子〓

今年度は喜多原学園児童三名、島根県立わかたけ学園児童三名の合同チームとして出場することになりました。試合前の合同練習では、大きな声を出してボールに向かっていくわかたけ学園児童に圧倒され、さらにコミユニケーションが苦手な児童は、慣れない人との関わりに緊張と不安を覚えました。その中で、徐々にボールをつなぐ意味を考えるようになり、最後まで走ってボールを追いかける姿が見られるようになりました。大会で勝つことはできませんでしたが、ひとつのチームとしてそれぞれの児童が役割を果たすことができました。大切な経験の機会をくださったわかたけ学園の皆さまありがとうございます。

四月着任後、監督をさせていただくことを非常に楽しみにしていました。それと同時に、自分で希望する部活動とは違う環境で、児童がどれだけの意欲を持てるか不安もありました。しかし実際は、目の前に置かれた事柄に精いっぱい取り組んでいる姿勢に心動かされる日々でした。それは毎日の練習に参加してくださった分校の先生方、ボランティアの方々への支援があつ

たからだと思えます。今後も、バレーボールをする意味と楽しさを伝えていきたいと思えます。



女子児童作文

私は八月に入所して来ました。バレーを体験したことがなく、全てがこちらのスタートでした。そんな私に皆が親切に接してくれました。何回サーブを打つても、ボールがネットに届かず諦めそうになったことも正直たくさんありました。そんな時は、いつもキャプテンが支えてくれました。キャプテンはいつも皆に優しく接してくれます。サーブの打ち方や、レシーブが上手く出来なくて聞くと「こうすると打ちやすいよ。」と教えてくれました。

私には、キャプテンの存在が大きかったと思えます。

バレー大会までの間、分校の先生に協力してもらい、数えきれない程、練習しました。

私たちは児童の人数が足りなく、島根のわかたけ学園の人たちと合同チームで大会に参加することになりました。合同チームになると、いつも一緒にいるわけじゃないから、思うようにいかなくてイライラしたことも何度もありました。でも練習を重ねていくうちに、少しずつ息が合うようになりました。その時はすごく嬉しかったです。

バレー大会の日はすごく「ウキウキ」と「ドキドキ」で皆、会場につく前から疲れていました。バレー大会には、児童相談所の人や、原籍校の先生、私の家族が来てくれました。来てくれていると知った時は良い所を見せようと頑張りました。試合は二日間ありましたが、二日間とも〇勝四敗で勝てませんでしたが、「優勝がゴール」じゃない、最後までつなぐ」がゴールだったので後悔はしていません。

私は、皆で大会に出場できて嬉しかったです。今年は一勝もできなかったのですが、来年は一勝することを目標として、大会に「喜多原学園」で正式参加

したいです。これからも大会まで頑張ります。



中国地区児童駅伝・マラソン大会

駅伝部監督 松田 治

平成三十年十一月二日に広島県で行われた第一八回中国地区児童駅伝・マラソン大会に男子児童十名が参加しました。今年は参加人数が十名と多く、駅伝の部に一チームとマラソンの部中学生以上の部と小学生の部にそれぞれ参加しました。大会当日は、天候にも恵まれ、最高のコンディションで大会に臨むことが出来ました。

今大会は東広島運動公園内を走るコースで、普段練習で走っているコースよりアップダウンがなく、とても走

りやすいコースでした。今回は、大会前に試走を行い、コースや会場の雰囲気など事前に確認し、万全の準備をしていました。

そして大会の結果は、駅伝の部で準優勝。個人では、マラソン・小学生の部で準優勝と最高の結果となりました。

また、駅伝の部では区間賞を受賞した児童もいました。全員が自己ベストを更新とはいきませんが、夏からの厳しい練習の成果を十分発揮してくれました。レース後には、児童が充実した表情で、「準優勝出来て良かったです。」「自己ベスト出ました！」など言っている姿を見て、児童にとつて達成感を味わう最高の思い出になったことと思います。しかし、充実感や達成感を味わう中で、あわせて悔しさを感じる児童もあり、「来年は全区間で区間賞を取って、優勝したいです。」「と話していました。そして、大会後も休む間もなく来年度に向けて練習に取り組む児童の姿があります。その姿を見て今から来年度の大会が待ち遠しいです。

応援していただいた皆様、日々の練習を手伝ってくださった職員の皆様、本当にありがとうございました。

男子児童作文

夏の野球大会が終わってすぐに、駅伝練習を始めました。夏は、ものすごく暑く汗をたくさんかきました。駅伝練習は、ペース走とインターバル走、山登り、坂ダッシュなどをしました。山登りや坂ダッシュは暑さもあり、本当にきつかったです。また、男子寮で職員対児童の駅伝大会をしたり、広島県まで試走に行ったりして大会に向けて準備しました。

大会当日、喜多原学園出発前に、優勝してこいと言っているかのように虹がきれいにかかっています。それは、みんなが頑張ったからだと思いました。それから広島県に行き、駅伝大会が始まりました。

まず、マラソンの部の小学生が走りました。二位でした。その次に、マラソンの中学生が走りました。みんなとても速かったです。次に、待ちに待った駅伝の部でした。一区に喜多原で一番速い児童が走りました。二区の児童もとても速かったです。三区は、小学生の児童が走りました。小学生で駅伝の部を走った児童は、一人だけでした。四区の児童は、二位で帰ってきました。五区のアンカーは、自分が走りました。二位で、四区の児童が帰って来たとき、抜かされたらいけないと思

い緊張しました。最後の運動公園のトラックを走っている時、みんなの「頑張れ」と言う応援が聞こえてきました。それで、最後まで頑張れました。結果は、準優勝でした。自分は、そのメダルは、人生初のメダルだったのでとても嬉しかったです。

これからも、しんどいことや辛いことがあると思うけど、この駅伝部として活動した経験を生かして頑張っていきたいです。



園遊会

足立 渉

三十年度は、春と秋に二回の園遊会を開催しました。この園遊会で好評を頂いているのが、開会式で行われる店舗紹介です。児童を中心に各店舗が工夫を凝らして提供する商品の紹介をし、緊張した様子や練習したことが窺える内容、ぶっつけ本番を感じるものの中にはあります。また子どもたちの店舗紹介を毎回楽しみにして頂けるお客様もおられます。

秋の園遊会での目玉に定着している「ぶち合わせ太鼓」も同じく好評を頂いております。今年も子どもたちと話し合い、日ごろの生活の姿が垣間見える園遊会にしていきたいと思えます。園遊会への御来園、御協力、よろしくお願いいたします。

石本 優里

三十年度は、春の園遊会（六月）、秋の園遊会（十一月）と二回の園遊会を開催しました。春の園遊会では、児童数も少なく、初めて園遊会に参加する児童が多かったため戸惑いながらではありましたが、積極的にお客様と関わり、丁寧な接客をする姿が見られました。また、前日の準備、当日の後片付けも手をぬく児童はおらず積極的に動いてくれました。

秋の園遊会では、例年行っている太鼓の演奏に加え、各寮での活動報告を児童主体で行いました。男子寮は野球大会と駅伝大会の報告、女子寮はバレー大会の報告について、それぞれ児童が原稿を考え、お客様の前で発表しました。練習の成果をしっかりと発揮し、堂々と発表する姿に、春の園遊会からの児童の成長を感じました。園遊会は児童にとって、成長した姿をお世話になっている方々に見ていただく場で

あり、接客や発表を通して児童自身が成長する場でもあります。日々の生活とはまた違った刺激があり、園遊会での達成感が児童のなかで自信として残ります。今年も児童の成長の機会であります園遊会への御来園、御協力、よろしくお願いいたします。



学園での思い出

〜女子児童作文〜

私は、一昨年の十一月に喜多原学園に入所してきました。自分が喜多原学園に入ることに納得ができなかった私は、最初誰にも心を開くことができませんでした。しかし、みんなと毎日一緒に生活するにつれ、ありのままの自分をさらけ出せるようになりました。私にとって喜多原学園は第二の家で、とても大切な居場所でした。今年私は受験生ということもあり、精神的

に自分を保つのが難しかったです。でも、そんな時、職員や分校の先生、そして寮の友達が支えてくれました。

喜多原学園に来て私は、人にやさしくすることはいいことだと思えるようになりました。そして、人にやさしくすれば、自分も人からやさしくしてもらえると気づきました。喜多原学園に来たからこそ、みんなと出会えたので、今私はこれまでの自分も悪くないと思えています。

これから退所して私と関わってくれた全ての人に感謝して楽しい高校生活を送りたいです。喜多原学園で過ごした日々は私のかけがえのない大切な宝物です。喜多原学園のみんな、出会ってくれてありがとう。



平成三十年度着任職員

〜加川 綾子〜

平成三十年四月に米子児童相談所から異動してきました。これまで、児童相談所併設の一時保護所で児童指導員として勤務したこともあります。さまざまな背景があり入所してこられることは共通していますが、喜多原学園では、一時的ではなく、ある程度長期で生活をしていきます。そのためには他児童との関係構築が必須です。「もしここに来ていなかったらあの子とは絶対関わってなかった。」と他児童について話す子がいます。その通りだと思います。関わらなければならぬ状況だからこそ、これまでできなかった経験や発見ができます。また、大人の言葉より、子ども同士の言葉で状況が変わる場面を多く見してきました。子ども間の力を最大限に引き出せるよう、個別と集団のバランスを大切にしながら支援していきたいと思えます。喜多原学園で勤務して、多くの方に支えられていることを実感しています。継続的に協力していただいている地域の保育園や更生保護女性会の方をはじめ、多くの方との交流をさせていただきました。外部の方からあたた

かい言葉をかけていただくことは子どもたちの自信になります。

く太田 裕美く

昨年四月に喜多原学園に異動になって、本当にあつという間の一年でした。振り返ると、寮の子どもたちや職員、分校の先生方、事務室の職員、学園のすべての人達にいつも助けていただくばかりで、「感謝」という言葉しか出てきません。不器用で、すぐにいっぱいになってしまふ、弱虫で大人として未熟な私が、子どもたちに何を伝えるのか、「支援していくこと」とは何かをずっと探しながら今も探しながら、自分の子どもたちのために「できること」を増やそうと日々を過ごしています。しかし、一年過ごして

自分の甘さに気づかされるばかりで、まだまだより意識しながら、大人としても成長していかなければならないと痛感するばかりです。それでも、一緒に生活したり、成長を見守り、時に導いてくださること、今、自分が周囲から受けていることをしっかりと子どもたちに伝える形で伝えていかなければならないのだと最近は特に思っています。まだまだ未熟な私ですが、これからも子どもたちと一緒に悩みながらも、ともに歩んでいきたいです。

す。

く尾室 佳奈く

薄紅色に彩られた、満開の桜の喜多原学園へ着任してから、もうすぐ二度目の春を迎えます。子どもたちと共に曲がりくねりながらも登ってきた『育ちの山』。今足を止め、振り返れば、その山は子どものものだと思つて登っていたけれども、間違いなく自分自身の山でもありました。

この喜多原学園の生活は気付きの宝庫です。日々の生活を通し、子どもたちの課題に、そして何より自分自身の課題に気付く瞬間が多くありました。その気付きの多くは、課題という石に躓いたその時に見つかるため、着任当初は右往左往するばかり。しかし共に生活する中で、他の職員や子どもたちと一緒に考え、実践し、乗り越えていきました。『気付く』『考える』『実践する』ということを繰り返しながら、私も子どもと成長しました。

育ちを支える土壌が、この喜多原学園には備わっています。先輩方が培ってきた確かな支援法、そして新しい支援法、それらを豊かな自然の中で、チームで支え合いながら実践していただけることは、私にとつて働く喜び、人生の充実感になりました。これから、ま

た次の一年が来ます。新たな人と、新しい気付きを大切にしながら、またこの『育ちの山』を皆でしっかりと歩んでいこうと思います。

く松尾 あけみく

西部総合事務所福祉保健局より九年ぶりに、学園勤務となり、早一年が過ぎようとしています。

以前は学園の厨房で勤務していましたが、今度は調理師から現業技術員へ職種変更したため、業務内容もかわりました。

そして、子どもたちとの関わりが多くなるということもあり、いろいろな不安をもちながらのスタートでした。今も不安や戸惑うことのある毎日を過ごしています。しかし、子どもたちが、日々成長していくなかで、学園での生活が心地よく過ごせる寮となるように、私なりに陰ながら支援していきたいと思っています。

仕事に慣れていないところもあり、いろいろな悩みは続きそうではあります。焦らずあきらめずに自分のペースで子どもたちのためにも頑張っていきたいと思っています。



米子市立福生中学校

いずみ分校

く国語科担当 金田 興一く

四月、玄関前の見事な白木蓮を見上げながら赴任しました。グラウンドにあるポプラの木から飛ばされる綿毛によって、畑とグラウンドの間の道路が真っ白になる、この辺りでは珍しい景色を六月には見ることができました。正面玄関の両脇にサルスベリがありました。(百日紅) という名のごとく、夏から秋にかけて長い間、花を楽しませてくれましたが、二階の教室からその花を見下ろす情景はお気に入りの一つでした。

少人数での授業なので、まさしく「個に応じた」授業を経験しました。これまでの経験とは異なる一人ひとりに対応する授業の、魅力と難しさを感じながら日々の授業をこなしました。どの生徒もまじめな姿勢で戸惑いながらの授業に臨んでくれました。

素晴らしい環境、生徒、分校の先生方、学園の職員の方々に支えられながら楽しく貴重な時間を過ごすことができました。退職後、学校教育から僅かな期間でフェードアウトする身へのみなさんの厚情を感謝します。ありがとうございました。

く保健体育科担当 小別所 光く

いずみ分校に着任し、目の前にいる子どもたち一人ひとりが伸びて輝くため、日々どのように関わるべきなのか、どのような力をつける必要があるのかを考えました。いずみ分校だから特別なことをするのはなく、どこでも胸をはって生活できるような力をつけてほしいと思っていました。特に、保健体育の時間を中心に「感じる力」をテーマに活動しました。音を聞いて耳で感じる、目で見て感じる、実際に身体を動かして感じる、まず感じる力をつけることで気付く力がつき行動する力へとつながっていくと思えます。それを子どもたちが生活場面で実践できるようにしてきました。二期最初の体育の授業で、子どもが体育館の靴が散らかっていると感じ、整えなければと気付き、整頓する姿を見ることができました。生徒の中にたくさんの力がつき、成長を感じることができました。

子どもたちと濃い時間を共にできたことを心からうれしく思っています。今後さらさら成長して、さまざまなことを感じる豊かな心を持った人になってほしいと思います。

く保健体育科担当 岡本貴彦く

私は今年の一月下旬に、いずみ分校に講師として赴任しました。いずみ分校が先生として初めての現場であり、社会人としても初めての就職ということで緊張と戸惑いがありました。この三学期の忙しい時期に赴任してきて私を受け入れて接してくれる子どもたちと、指導してくださる先生や助言してくださる学園職員の方々に感謝しています。

この学校に来て一ヶ月半が経ちましたが、初めに思ったことは子どもと大人の関係性が良く、非常に落ち着いて生活を送っていることです。そのいい雰囲気があるおかげで私もすぐ子どもたちとコミュニケーションをとることができ、この短い間でも子どもたちの成長を身近に感じることができてとても嬉しいです。

小学生や中学生の年頃で枠のある生活を送り、その中で授業や日課に一生懸命取り組む子どもたちの姿を見てとても感心しています。子どもたちには退所した先へ目標を持ち、その目標に向かつていける力を学園で身につけて幸せな人生を送ってほしいなと思います。



平成30年度

喜多原学園年間行事

4月 着任式 始業式 観桜会 遠足
 5月 芋の苗植え交流会
 6月 いずみ分校修学旅行
 7月 中国少年野球大会（鳥取県）
 福生東分教室修学旅行
 カヌー教室 海水浴 園遊会 終業式
 8月 キャンプ
 9月 始業式 きたか保育園交流
 大山登山

10月 芋掘り交流会
 中国女子バレーボール大会（岡山県）
 11月 中国少年駅伝・マラソン大会（広島県）
 創立記念マラソン 園遊会
 米子更正保護女性会との交流会
 12月 きたか保育園交流
 終業式 クリスマス会 餅つき
 1月 とんど 始業式
 2月 スキー・スノーボード体験
 3月 卒業証書伝達式 修了式 離任式



創立記念マラソン



遠足



修学旅行



BBS 交流運動会



クリスマス会



アンガーマネジメント講座



米子更生保護女性会との交流



大山登山



とんど



こたか保育園との交流



ダンス教室



梨狩り



スキー・スノーボード体験



餅つき

後援会報告

平成30年度後援会総会が、平成30年5月12日に開催されました。

| | | |
|------------------|----------------|----------------|
| 一、平成29年度事業報告 | 平成29年度歳入歳出決算 | 平成30年度歳入歳出予算 |
| 一、平成29年度収入支出決算報告 | 収支決算額 441,815円 | 収支予算額 441,000円 |
| 一、会計監査報告 | 支出決算額 221,637円 | 支出予算額 441,000円 |
| 一、平成30年度事業計画(案) | 繰越額 220,178円 | |
| 一、平成30年度収入支出(案) | | |

【後援会役員】※敬称略・順不同

| | | | | | |
|------|------------|----|-------|----|-------|
| 会長 | 赤沢 亮正 | 委員 | 後藤 充司 | 委員 | 保坂 葉子 |
| 副会長 | 上森 英史、本田 修 | 委員 | 本池 弘昭 | 委員 | 音田 幸真 |
| 事務局長 | 松永 芳久 | 委員 | 山関 明克 | | |
| 監事 | 中川 正純 | 委員 | 塚田 和彦 | | |
| 監事 | 王島 茂 | 委員 | 田中 浩之 | | |

会員数 48名 (H31, 4, 1現在)

御寄付ありがとうございました。※敬称略・順不同

- ・ (株) 備中屋本店 代表取締役 上森 英史
- ・ 馬詰 俊哉 (喜多原学園前園長)

児童在籍状況

| | 小学生 | | 中学生 | | 中卒生 | |
|----------|-----|----|-----|----|-----|----|
| | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 |
| H30 4月1日 | 1人 | 0人 | 4人 | 2人 | 0人 | 0人 |
| H31 1月1日 | 1人 | 0人 | 9人 | 3人 | 0人 | 1人 |
| H31 4月1日 | 0人 | 1人 | 7人 | 2人 | 1人 | 1人 |

職員の異動

学園職員

(平成31年3月31日付)

| | | |
|----|-----------|------------------|
| 転任 | 係長 | 田中 純一 (東京本部) |
| | 係長 | 青島 茂雄 (倉吉児童相談所) |
| | 児童自立支援専門員 | 音田 幸真 (福祉相談センター) |
| | 児童生活支援員 | 遠藤 翔吾 (皆成学園) |

(平成31年4月1日付)

| | | |
|----|-----------|----------------------|
| 着任 | 係長 | 内藤 和宏 (倉吉児童相談所) |
| | 係長 | 齋河 由美 (西部総合事務所福祉保健局) |
| | 児童自立支援専門員 | 青砥 美紗 (福祉相談センター) |
| | 児童自立支援専門員 | 田村 裕介 (新規採用職員) |

分校職員

(平成31年3月31日付)

| | | |
|----|----|-------------------|
| 退任 | 教頭 | 吹野 健一 |
| | 講師 | 金田 興一 |
| 転任 | 講師 | 小別所 光 (南部町立西伯小学校) |
| | 講師 | 岡本 貴彦 (米子北高等学校) |

(平成31年4月1日付)

| | | |
|----|----|--------------------|
| 着任 | 教頭 | 吉田 豊 (米子市立湊山中学校) |
| | 講師 | 藤井 勝己 (米子市立福米中学校) |
| | 講師 | 青笹 博 (米子市立後藤ヶ丘中学校) |
| | 講師 | 山下 順子 (米子市立加茂小学校) |

編集発行

鳥取県立喜多原学園

鳥取県米子市泉706

TEL 0859-27-1101

FAX 0859-27-1611

編集後記

喜多原だより No. 71号を作成させていただきました。

今年度も編集作業の中で、児童と過ごした日々を振り返り、児童の成長を感じるとともに、様々な表情を見られてとても嬉しく思いました。来年度も学園職員が一丸となって、より良い支援ができるように努力していきたいと思います。

日頃お世話になっている地域の皆様、学校の先生方、関係者の皆様に、学園職員一同、深く感謝申し上げます。今後とも御支援、御協力いただきますようよろしくお願いいたします。